

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

ショートな初体験——ぼくも逮捕された・その一 R・リケット 2

くじやくのくしゅみ 木島始 6

任意の一日 山川枯草木 8

フィリピン・民衆の生と民主化への運動 高頭祥八 10

水牛通信一〇〇号記念コンサートのおしらせ 19

BOOK INN閉店記 津野海太郎 20

料理がすべて 田川律 24

可不可(その一) 高橋悠治 28

走る・その② デイヴィッド・グッドマン 30

VOL.9 NO.2

毎月1回・10日発行

定価200円

ショートな初体験 ぼくも逮捕された その一 R・リケツト

去年の十二月号の「水牛通信」に載った横堀さんの話を笑いながら、とてもおもしろく読んだ。「犯罪」そのものよりも、彼の「権力への独特の反感」の方に目を向けるのは、さすが日本の警察・検事だな、と思った。というのは、さる十二月十八日、ぼくも生まれてはじめて逮捕されたからだ。「指紋押捺拒否」の容疑で、やはり二泊三日、渋谷署のお世話になり、横堀さんと同じ臭いメシを食わされた（実際にはお茶も食事も拒否したが）。ただ違うところは、ぼくは逮捕を予期して、しらふで迎えた。それは友人Pさんが言う「一指、大罪」を覚悟していたからだ。

つかまる前後の事情をひとこと言おうと、本当に大変な年末だった。すでに、詩人金明植さんを初めとして四人の永住権をもたぬビザ切れの拒否者は不法残留状態となり、国外追放を強いられていた。そして、十一月上旬から、警察が全国で任意呼び出し状をかつてない急速なペースで、延べ百五十人ほどへ手渡した。

それから、十七日、二十日、強制退去処分、任意出頭状の大量送付などに対する抗議集会で、十人がバクられた。丸の内警察はそのうち、在日中国人を含めて三人の家を家

宅搜索し、二人を起訴した（その一人は七十日間の拘留に耐えて、釈放されたばかりだが、もう一人はまだ東京拘留所にいる）。十二月に入ると、警察は大阪、東京で、自治体を強制捜査で脅迫して、住民票に等しい拒否者の「原票」の写しを手に入れて、六人の拒否者を相次いで逮捕した。

警察・法務省の弾圧に対して七人の仲間が十二月十八日付で「私たちは指紋押捺拒否した。確定的な逮捕予定者です」という傑作文「逮捕予定者宣言」を出した。その中に、「私たちの指紋押捺拒否は私たちの三十年（＊）の怒りである。私たちの恨である。そして、自由への願望である。私たちは、私たちの拒否の闘いを、人として誇るに足る行為であり、思想であると確信している。来るべき私たちの逮捕が排外と抑圧の歴史に終わりを告げる確かな鐘の音として響くものならば、私たちの逮捕は、私たちにとって、光栄である」と書いてある。しかし、逮捕を予期していても、逮捕への対応はいろいろありうるだろう。例えば――

その① 犯人が高層ビルの七階の部屋に閉じこもっている。一中隊の機動隊がビルを包囲して、非常線を張っている。

る。公安警察の特別部隊が部屋のドアをたたきつづけて、中へ突入した途端に、犯人が窓から飛び下りてしまう。下が大勢寄り集まった近所の人々の一人は「あの人はいったい何をしたのか？」とあせんとした声で聞く。隣りのお婆さんは、こう答える。――「あれは、指紋押捺を拒否した人だよ」（朝鮮人Oさんのシナリオ）

その② 犯人が高層ビルの七階からエレベーターで下りた途端に下のロビーで待機している五人の私服が彼に近寄って来る。「ちょっと、お話しがあるから、一緒に警察署へいきましょ」と年とった温厚そうな刑事が控えめに言う。「逮捕ですか？」に対して「そうです」と答える。「じゃ、ちゃんと手錠をかけてください」との犯人の要求に、警官がこまった顔をして「マアマア、お宅は紳士だろう」とさすとす。犯人が静かに連行されて行く。

②はアメリカ人のぼくのシナリオだが、くやしいことに、実際に、初体験はそのとおり始まった。より大きな期待をしていたのに、結局、龍頭蛇尾に終わってしまった。けれども龍頭と蛇尾との間に、ちょっとした小喜劇がいくつか演じられた。第一幕は「指ごっこ」と呼ぼう。

国際化時代が正に到来した。その証左は警察でさえその風潮にあわせていることだろう。拘留手続きの時に、警官の通訳がつけられた。彼はニューヨークに一年ほど滞在した経験の持主で英語はべらべら。ただ、彼が一番警察の役にたったのは指紋採取の時だった。

さすが「逮捕予定者宣言」はその辺りを的確に予言していた。「私たちは、逮捕され連行されたのち、何人もの警察官たちに、手足を押さえつけられ、指をねじ曲げられて、十指指紋を暴力的に採られることになるだろう」

最近、逮捕されそうな拒否者の間では、警察署でくりひろげられる「指先の攻防戦」が最大の関心事となっているが、ぼくは指相撲はもちろん、レスリングもだめで、年もとってきたから激しい運動は苦手。だから「さあ、指紋だ」と言われた時、ぎょっとした。それにしても、どうにか勇氣を少しふりしぼって「でも、ぼくはイヤです」と小さな声で言った。それだけじゃ心配なので、両手をポケットにつっこんで、ひじ掛けいすに体を押しつけた。その恰好で、座ったまま、警察に理を説こうとした。

どっちみち、ぼくはこれまで何をしても、現場に指紋を

残さないように十分注意してきた。だから「今さら探ったって捜査の役に立たないぞ」と思ったが、どうも、この論理は効目がなさそうだ。指紋是非に関する大論争を三十分ほどやったが、結局、法解釈の相違に終わってしまった。

その時点で、「絶対に採らせるんだ」……「イヤダ」……「どうしても」……「イヤ」というキョートなやりとりのあとで、五、六人に押さえつけられて三十分ぐらいの間、汗をたらしながら懸命に「人差し指の踊り」を警官とおどった。踊りが始まると、ぼくの味方になったはずの通訳の警官は少しは実力を見せるためか、ぼくの後ろにそっと回って息が苦しくなるぐらい人ののどを締めたのだ。

腕がすぐポケットからずると引っ張り出されて、ぼくの好きなぼろぼろズボンの縫目はビリビリ裂けてしまった。でっぶりしたお相撲さん風警官の戦士がテーブルの上にひっぱりだされたぼくの腕の上に正座したのには参った。その時「もういい、オレは何でもするから」と言おうと思っただが、どうも、実際に出てきたのは「何でも言うから指先だけは勘弁してくれ」なさけない話。

その後、ぼくが押さえられても、腕がマヒしても、左手

の指先は自ら早いペースで踊り出た。五人の警官はそれにあわせるために全力を上げたが、足並がそろわなくなってきた。最終的に、よろめいて倒れそうになるところで、ぼくの左手の人差し指の指紋を賞品として取って、相手はあきらめた。「皆様！ どうもごくろうさまでした。ただいまの時間、本日の、日米指相撲国際大会、は終わります」という感じだった。

釈放されてから間もなくわかってきたことだけれども、ぼくが逮捕された時に、その担当警部補は渋谷区の区民部長に電話をして、「丁寧に行りますから、心配はいりません」というボス交が行われたようだ。渋谷警察は、確かに「丁寧」だった。ズボンは破け、指一本はよごれてねんざしていたが、それでもぼくの場合はまだいい方だった。

大阪の中国人女性のXさんの場合は、警官が最初の日、「キミの好きな指紋を採ってやるから」と言いながら、指一本分しか採れなかったの、次の日に残りの九本の指紋を強制的に採取した。また、十一月五日に尼崎で逮捕された金成日さんの場合には、五人の警官が議論なしに彼を押さえつけて、四つんばいにしてから、アルミとプラスチック

ックで作ったSM小道具のような強制具に、腕をはりつけにして、十指指紋を採った。同じ在日外国人でも、やはり自分が特別扱いだったことが、後から振り返ってみると、にがい思いとして残る。

「たかが指紋、されど指紋」確かにそうだ。参政権をはじめとして市民権のない在日外国人は「人間の自由を主張する、ひとつの証し、ひとつの表現として……」拒否と叫び、外登法を改正せよ」と要求して来た」（「宣言」）けれど、指先の小さな自由を求めただけで、再入国禁止、国外追放、逮捕、拘留、起訴などを覚悟しなければならぬ。が、それでもいい。差別せず、されど、人間らしく暮らしていきたいというのが拒否者の願望であり、権利である。たかが一本の指先、されど権力が揺らぐ。（つづく）

（*注・外国人登録法は一九五二年に制定された）

次回もドラマはつづき、漫才も登場します。

くじやくの
くしやみ
木島始

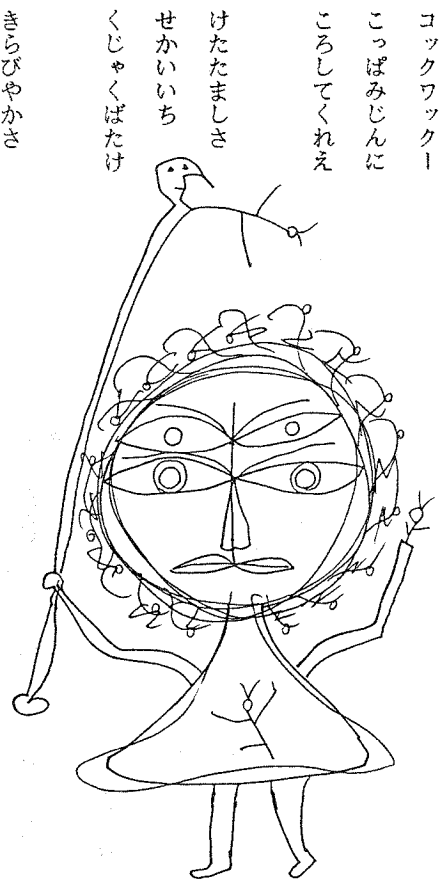


はたけいちめんこ
くじやくをうえて
かねもうけたよ

とりたちのあしは
じめんにうまり
ばたつくつばさ

こっぴどいや
こんちきしょう
コックワッカー

あさひるばんと
はたけじゅうに
とりのなきこえ



コックワッカー
こっばみじんこ
ころしてくれえ
けたたましき
せかいいち
くじやくばたけ
きらびやかま
せかいいち
くじやくばたけ
なにがなんでも
みみにせんして
もうけやいりっぱ

任意の一日 山川枯草木

十一号を拝見して、そういうことから、ひとつ。思えば、ずい分楽しく読ませていただいた。知り学ぶことも多かった。マスコミとでなく日本とつながっているという気分はかなりよい。さて、夏がどのあたりにあるか、近づいているらしい。何週間も前から夏時間はじまっている。時計の針をある日午前2時だけに一時間すすめる、というやつである。今年から三週間長くなった由。たしか始まりが二週間ほど早かった。これで日本との時差は二時間。こちらが早い。夕暮れがますますながくなる。

暑い日が突然きて、突然去る。六ヶ月前か後かにずらして季節調整すると、まだ日本の五月のおわりである。そのような一日、午後七時、柔道衣のマタを無断着用し、印度木綿の半袖にうでを通して、メルボルン映画祭短編小委のあつまりにでかける。今年度の「反

省会」。よかった、まあまあ、わるかった、を丸でかこむ質問表を配ることをしない。かなり雑然と話す。

作品の選考について。基準についてでない。メルボルン映画祭(六月)は、短編にコンクール(グランプリと最優秀ドキュメンタリ賞)がある。招待の他は送られてきたものを投票で選ぶ。今年、日本からは「はげけ鳳仙花——わが筑豊、わが朝鮮」(監督土本典昭 音楽高橋悠治)、「アントニー・ガウディ」(監督勅使河原宏、音楽武満徹)が招待。結局「ガウディ」は長編の方に組み込まれ、その他応募作はなし。選考映写会にでてくる人の数は一定しない。五人から十人。ABCDEに分けて札を入れる。今年は、Aが一つ入っただけでも上映する方式だった。いろんな人が委員会にあつまっている。中国電影輸出輸入公司国外業務部、元上海下放青年馬さんもいる、これはい

ろいろな考えを受け入れるやり方である。ただ作品が多すぎるという批判もあったらしい。耳の上の毛がのびかかってきたところにつるをのせて怪人二十面相のメガネをかけ、ポスト構造主義で映画を見ようとしているデビパンクねえちゃんが、Aか非Aかだけを投票すればいいというので、自同律の不快を覚え、CかDかをきめることが選考会出席の快楽の過半をしめる、と声をあげねばならない。結局一応Aは二つ以上。

その他、いろいろあったらしいが、暮れゆく窓の外をみている。夜の仕事を(一)をしていたころ、日の暮れ方をみることができないので、大した損失だと思っていた。今でも他にすることがあって、こうして、このような機会にしみじみユーカリの木の幹にうすれてゆく光をみているわけである。じつに貴重な時間だ。

来年一月末に選考会をはじめるときをきめ、何となく終わって、スー・スチュアートにきいてみる。この人が修士論文を書いている大島渚の「絞死刑」を一緒にビデオでみたとき、自分の学生で韓国から国際関係論をしにきている人がいるからとアンドルー・ペリーが呼んでくれたチュクンさんが用事があるからと途中で出ていったけど、あれから会って話きいてみた? いいえ。外はほぼ暮れきった。パーク通りを通って帰る。料理用のシェリーがまだ残っているはずである。

*メルボルン映画祭短編映画コンクール申し込み用紙は、

Melbourne Film Festival
41 A'Beckett St.,
Melbourne, Vic., 3000,

Australia

Tel. 03-663-1395

にあります。

長さが六十分を越えると賞の対象にはなりません。英文字幕でねがいします。その点につき問題があるようでしたら、日本フィルムライブラリー協議会のシミズアキラさんに御相談ください。

(編集部注・この原稿は昨年末にオーストラリアから送られてきたものなので、文中「今年」とあるのは「昨年」のこと、したがって「来年」とは「今年」のことです)

フィリピン 民衆の生と民主化への運動 高頭祥八

マニラ・一九八五年五月

赤旗が林立するボンファシオ広場の上空、青く澄み渡った真夏のマニラの空に溶け込むように黄色くKMU（五月一日運動）と染め抜かれた、真っ赤な旗が上がっていった。

市内、近郊の各方面からデモ行進をして、ここに集まった五万人の労働者の間から、ピリピーノのインターナショナルの歌声が沸き上がった。またマルコスが健在を誇っていた一九八五年五月一日、ラポール・デーと呼ばれるフィリピンのメーデーの日である。壇上には昨年一月に虐殺された、オリアKMU議長の名もあつた。

わたしの所属する、日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議（J.A.A.L.A）では、十一年前から、「第三世界とわれわれ」をテーマとして、第三世界の美術家たちと、作品を

通じて交流する展覧会を開いているが、一九八四年の展覧会には、前年のアキノ暗殺事件以来、マルコス退陣と民主化要求で激動するフィリピンから、二人の画家と作品を招いた。そのとき「インターナショナルはフィリピンではまだ歌えない歌だ」と彼らがいつていたその歌がそれから八ヵ月たった今日、マニラの空に大きな合唱となってこだましている。

わたしをフィリピンに招いてくれたCAFFPA（前進するフィリピン民衆のための美術委員会）による国際美術展は、この年の四月、マニラに隣接するケソン市で開かれた。この展覧会には、国内、国外から寄せられた、数多くの作品が展示されたが、この展覧会でフィリピンの美術家たちが主張していることは、フィリピンの民主化と、国際的隷属関係からの、民族的、文化的独立ということ、作品の多くも、

国際的新植民地主義による、フィリピン民衆への抑圧と搾取、独裁政治による社会的不平等と不正、そしてそれに苦しむ民衆の姿が主要なテーマとなっていた。またおびただしい数の島からなるこの群島で、それぞれ独自の文化を持って生活している、多様なフィリピン民衆のアイデンティティーの追求も、彼らの運動の主要なテーマである。彼らは自分たちの作品を「社会的リアリズム」と呼んでいるが、その表現はきわめて多様で、リアリズム、表現主義、シュールリアリズム、ポップアートまで、中広い様式が含まれていて、技術的水準も高い。

これらの作品の背景となっているフィリピン社会は、独裁政権による富の偏在、膨大な対外債務、生産性の低下、急激な人口増による雇用問題の悪化など、きびしい経済状況は、高度のインフレとなって庶民の生活を圧迫してい

て、わたしがいた四月から五月にかけても、銀行、タクシー、ジープニー、ホテル、工場など、たくさん企業のストライキが目についたし、マニラ湾の汚濁に抗議する湾岸漁民の集会や、広範な文化人を集めたCAFFPA（憂慮するフィリピン芸術家）による、国立フィリピン文化センター（CCCP）のボイコット集会が各所で開かれ、新聞には連日のように、ミンダナオ、北部ルソン、サマルなどでのNPPA（新人民軍）と政府軍の戦闘が報道されていた。

元マニラタイムズの編集者で、暫定休戦協定のNDF（民族民主戦線）交渉団代表になったオカンボが、留置されていた刑務所から、プレスクラブの式典に出席して、そこから脱走したのもこの頃のことである。
また五月はじめには、バヤン（愛国者同盟）と呼ばれる、労働組合、農民

団体、学生、少数民族、市民団体など、今までにない広範な階層を組織した、フィリピン最大の反マルコス政治勢力が結成されて、社会変革に向けて激しく動く民衆のエネルギーは、まさに地殻構造の、急激な変化を感じさせるものがあった。

C A F P A の展覧会には、ミンダナオとネグロスから参加したグループの中の、二人の画家に注目させられた。二人の作品はそれぞれ、ミンダナオとネグロスにおいて現実に起こっている、日常的な恐怖をテーマにしたもので、ミンダナオの画家の絵は「ダバオ・道端のアトラクション」と題されていて、迷彩服を着てタバコをくわえ自動小銃をかまえた男が、屈辱と恐怖で顔を引きつらせた一人の男の頭に足をかけ、まわりには、笑いながらピストルを持った男たちが立っているという絵である。またネグロスの画家の絵は「サカ

ダ」という題で、サカダは砂糖きび農園の季節労働者のことだが、砂糖きびの葉の上に四人の男が担ぐ蓋を開けた棺桶、それは煙突から煙を吐く製糖工場で、その棺桶に重い砂糖きびの束を背負って一人登っていく、孤独なサカダをプリミティブに描いていて、どこか不気味な感じのする不思議な絵である。二つの絵の表現は、ともに平面的でナイーブだが、それが新しい表現方法となつて目を引きつける。

ネグロスの砂糖きび労働者の貧困と窮乏は、断片的に聞いていたが、この「サカダ」という絵を見ていたわたしに、展覧会主催者の一人が「ネグロスの砂糖きび労働者の生活はひどい、いっつ何が起きてもおかしくない状態だ」といった。

ネグロス・苦い砂糖の島

きび労働者の姿を垣間見た感じだった。ネグロスの面積は四国の約七〇%、緑の豊かな美しい土地である。砂糖きびの単作農業が、耕地全体の六五%を占める西州は、海岸まで広がるカンラオン火山、マンガランガン、シライなどの山裾に、広大な砂糖きび畑が広がっている。その規模は、わたしの想像を遙かに越えるもので、バコロドから自動車で、南へ行っても、北へ行っても、砂糖きび畑は延々と続く。

ネグロスでは一九世紀後半から、砂糖きび農園の開発がすすみ、隣接するパナイ島から仕事を求めて移住してきた人々によって、開拓が進められてきた。以来一〇〇年、スペイン統治時代の遺風をそのまま残す封建的主従関係と、極度に安い労働賃金の上に砂糖産業は築かれていった。大農園はスペイン時代そのままアシエンダ、大農園主はアシエンデロと呼ばれ、アシエンダ

ネグロスは、フィリピン中部ビサヤ諸島の一つで、フィリピン四位の島である。面積一万二六〇〇平方キロメートル、人口約二九〇万人。ココナツを主産業とする東州、ネグロス・オリエンタル(州都ドゥマゲッテイ)と、砂糖産業に生活を依存する西州、ネグロス・オキシデンタル(州都バコロド)に分かれるが、世界六位の砂糖輸出国であるフィリピンの、全砂糖生産量の七〇%がこの島で生産され、「シユガラランド」と呼ばれている。西州の人口は約二二五万人で、その七五%に当たる人たちが、砂糖産業で生活している。島の中央を南北に山脈が走り、最高峰はカンラオン火山、二四六五メートル。

マニラから一昼夜、船でネグロスに着いたわたしが、バコロドの街で真っ先に見たのは、静かなデモ行進だった。真夏の白昼、白っぽいバコロドの道

を、そのデモは青い旗とプラカードを立てて黙って歩いていった。先頭の人は大統領マルコスの肖像を胸に掲げて、シユプレヒコールも無く、歌声も無く、デモは通っていった。あとに続いて行進する人たちの服装は貧しい。着古したTシャツや作業衣にサンダル、破れたビニールの帽子、白い布を頭に巻いた人、木の葉をかざして真夏の炎熱を防いでいる人もいる。女も混じって隊列は続く。人を乗せたトラックが通り、水牛に引かせた荷車も通っていった。道端に立ち止まった人たちも黙ってこのデモを見送っている。

彼らは北のアシエンダから来たサカダたちだ、ということだったが、行進する彼らの姿は、マニラの労働者たちの熱気あふれるデモとはあまりにも対称的で、植民地時代の経済構造がそのまま残っているというネグロスで、社会の底辺を形作っている、貧しい砂糖

に定住する労働者をドゥマーン、収穫期などに雇われる季節労働者をサカダと呼ぶ。そして二一五万人の〇・五%にすぎないアシエンデロとその家族が、土地の五三%を所有し、収入の六〇%を手に入れているといわれ、土地を持たない、アシエンダや製糖工場で働く、砂糖労働者とその家族は一六一万人にものぼる。

何世代にもわたって続いた、封建的主従関係を色濃く残すアシエンダでは、ドゥマーンは家族とともに農園の中に住む。ニツパやしの葉と竹と、わずかな木で建てられた貧しい小さな家は、アシエンドロから与えられたものだ。賃金は請負制の出来高払いだから、一年のうち六ヶ月の農閑期には収入が無い。アシエンデロから米を借り、最低の生活必需品も、アシエンデロの経営する店からツケで買う。この借金は次の農繁期の収入から現金で返し、蓄え

の出来ないままに、また仕事の無い季節を迎える。これは生涯切れることのない、長い長い鎖だ。この鎖とアシエンデロの家長的恩情主義が、労働者をアシエンダに従属させ、彼らの貧苦のあえぎを隠していた。

しかし年を追って深まるフィリピン経済の悪化と、市場価格が生産コストの四分の一以下という、一九八四年末からの国際砂糖価格の大暴落は、砂糖の単作農業に頼るネグロスを直撃してアシエンデロは栽培中止か、大幅な生産縮小に追い込まれ、三〇万人の労働者が仕事を失い、ただでさえ貧しい彼らを、その家族とともに、いっきよに死と直面する飢餓の淵に追い込んだのである。

マルコス時代、政府は五〇〇万ペソの緊急貸付をおこなったが、この救済貸付金は、農園主の手を通っていく途中で消えてしまったという。フィリ

ピンの砂糖産業は、大農園主で駐日大使だったマルコスの友人、ベネディクトを委員長とする、フィリピン砂糖委員会が支配してきた。彼らは巨額の利益を生むために、封建的な社会構造を温存して、貧困の労働者を作ってきた。

フィリピンは本来豊かな国である。ネグロスも例外ではない。バコロド市内のリベルタ、セントラルなどのマーケットをはじめ、市内の商店には、あらゆる食料品、衣料品、雑貨が豊富に並んでいる。しかしあまりの貧しさから、この豊富な食べものを口にするこゝとできずに、餓死していく子供たちがいる。ネグロスではどの砂糖労働者の家庭でも、低い栄養から何かの病気で、少なくとも一人は幼児を死亡させているというが、一昨年飢餓のために死んだ子供は一〇〇〇人を越えた。そしてなお一四万人が栄養失調で、危険な状態にあるという。

この年の九月二〇日、ネグロス北部の町エスカランテの市民ホール前の広場には、窮迫した砂糖労働者とその家族を中心に、五〇〇〇人の人たちが食料の配給を求めて集まっていた。この群衆に向かって市民ホールの屋上から、政府軍の機関銃が火を噴いた。銃弾は逃げまどう人々を追って、女性、子供を含む二七人が殺されたといわれる。

「俺の友人には山へ入った者もいる」バコロドで知り合った若者の一人がいった。山へ入る、それはNPAに参加することを意味している。この年ネグロスのNPAはまだ、南部と山間部を中心に活動しているようだった。

バコロドふたたび

一九八六年一〇月、バコロドの空港はマニラから来る家族、友人を迎える人々で賑わっていた。わたしには二度

目のバコロドである。

その間にフィリピンではマルコス政権が倒され、アキノ新政権が誕生した。PNA（人民党）が創設され、オラリアが議長になった。CAPがポイコットを呼びかけていた、フィリピン文化センターは開放されて、マニラの街は、文化的には自由な雰囲気が強かった。

「人民党創設のときは、文化センターが赤旗で埋まった」とマニラの友人は話していたし、イメルダが銀行に投資させて作ったモバ・コレクション・ギャラリーは、フィリピン・アート・ミュージアムと名前を変えて、さまざまな立場の美術家による、国際平和年にちなんだ「平和のための美術家たち」の展覧会が開かれていた。しかし新政権後もインフレは進み、新しい社会政策の実現は遅々としている。

バコロドの状況は、前の年よりもっと悪くなっていた。街にはシャッター

を下ろした商店や企業が目につく。街全体に活気が無く、マーケットの買物客も少ないように感じられる。竹や砂糖きびで作った民芸品も、品質が落ちて数も少なくなっていた。

仕事の無くなったアシエンダや、製糖工場から解雇された労働者が、バコロドに移住してきて、スラムの人口が急増している。その数は五万とも一〇万ともいわれているが、バコロドに來ても彼らに仕事は無い。七人の子供を抱え、一日一三ペソでセメント運びをする男。日当は二五ペソだが、仕事は月に七日しか無い、九人家族を養う臨時大工。つれあいに死なれ六人の子供を抱えて、月二〇〇ペソで洗濯に通う四〇代の寡婦。竹で作った三メートル四方くらいの粗末な小屋に、たくさんの子供たちと住む彼らに、政府からの援助はまだ何もない。（一ペソは約八円、いちばん安い米が一キロ約六

ペソである）

バコロドのスラムで会った人々には、ネグロス南部のアシエンダから、移って来た人が多かった。最も過酷な状況にあるアシエンダ労働者の家族や子供たちに、食糧の配給や環境改善の緊急援助をおこなっている、現地のNGO団体、CDREネグロス（市民災害復旧センター）のスタッフの説明でも、南部のアシエンダの状況がいちばん逼迫しているという。

砂糖労働者からの自立

ますます厳しくなる状況の中で、窮迫する砂糖労働者の生活を救うために、ネグロスで八万人の砂糖労働者を組織しているNFSW（全国砂糖労働者同盟）は、バコロドの本部を中心に、緊急を要する労働者と、その家族への食糧の配布、政府に対する労働者用の

農地開放の要求、さらに栽培を中止した農地を借り受けて、砂糖労働者が自活のための作物を作る、ファーム・ロット・プロジェクトの実施など、さまざまな活動をしている。ファーム・ロット・プロジェクトは、自活作物の栽培を通じて農業技術を身につけ、砂糖労働者の自立を計ろうというもので、すでに各地に三〇〇〇ヘクタールの土地を借りて、米、野菜、とうもろこしの栽培が進められ、豚、山羊の飼育もおこなわれているという。

砂糖きび労働者から、協同組合を基盤にした自立する農民へ、このプロジェクトには、彼らの将来への夢が託されている。しかし今年結成一六年を迎えるNFSWの歴史は、テロと弾圧にさらされた歴史でもある。一昨年ネグロスでは、二七人の組合、学生運動家が、拷問の跡も生々しい惨殺体となって発見され、八人が行方不明になって

いるといわれ、昨年二月アキノ政権に変わってからも、二人の組合活動家が惨殺されている。

フィリピンの一〇月は雨季の終わりの月だが、カンラオン火山は低い雲に隠されていた。バコロドから東へ、山裾の町ムルシア近郊のアシエンダ。アシエンダへ行く道では、道端のココヤシの葉が風に揺らいている。この辺りの砂糖きびの収穫は来年で、畑の砂糖きびはまだ若い。草むらに繋がれた水牛のむこうに広がる畑では、ドゥマーたちが家族総出で陸稲の刈り入れに働いていた。一七才のときからここで働いているという、ドゥマーの一人が話してくれる。

「このアシエンダは一三三ヘクタール。砂糖きびの栽培は縮小されて、今は八八ヘクタール、あとは米を作っている。ここには五四家族の労働者が住んでいて、子供は三六七人、俺のこ

ろは夫婦と子供五人で、一日に食べる米は三キロだが、今日の収入は一五ペソだから米代にも足りない。仕事の無いときは、近くの川でとった小魚の干物だけの日もある」

稲を束ねながらしゃべり合う、女たちのイロンゴ、束ねた稲を頭にのせて運ぶ男たち。米の収穫が終わると、次の砂糖きびの刈り入れまで、収入の無い農閑期が始まる。もうアシエンダには頼ることできない、窮乏の生活だが、NFSWに加入しているというこの労働者たちには、ピサヤンの陽気さがあふれていて、どの顔にも暗さがなかった。

西に日の傾いたアシエンダからの帰り道、ムルシアの町の警察署の屋上に、木を組んだ見張りのやぐらが見えた。同じやぐらはバコロドの警察の屋上にもあった。以前来たときには無かったものだ。

「エスカランテの虐殺のあと、ネグロスのNPAは急速に勢力を伸ばして、今はほとんど全島がその影響下にある」と話す男がいた。

ナショナル・デモクラシーへの運動

底辺で暮らす人々からは、政権は変わったがわれわれの生活は変わらない、という声が聞こえてくる。民主化のために活動している人たちは、いか反対側からの巻き返しがあるだろうと語る。事実、一時自由だった表現の分野に、最近また、さまざまな圧力がかかって来ていると聞く。ネグロスに象徴される、植民地時代以来の、小作農民の日常的な貧しさと飢えは、根本的な土地改革が実行されなければ、解決にはならないだろう。

揺れ動く社会情勢の中で、フィリピンでは今年二月に、憲法制定の国民投

票がおこなわれる。この憲法が民衆の希望と一致するものであるかどうか。憲法を自分たちのための、民主的なものにする、ナショナル・デモクラシーの運動が、ACPC（アジア民衆文化協議会）によって組織され、リサール州民衆組織連合と提携して、昨年九月から一〇月にかけて、マニラに隣接するリサール州の各地で、公演活動を開始した。若い舞台活動家やミュージシャンたちが、中心になっておこなわれた「民衆文化キャラバン」の運動である。

フィリピンの象徴である、三色旗をまとった女性の人形と、機材を積んだトラックを先頭に、若者たちを乗せた六、七台のジープニーが後に続く。民衆文化キャラバンはマニラをあとに、野を走り山を越えて、いくつもの町を訪れた。

キャラバンの通る町や村では、人々

が家からとび出してくる。若者たちは徐行する車から下りてピラを配る。キャラバンを迎える人々の目は、大部分が好意的だ。目的の町に着くと、迎える地元の人たちも加わって、呼び込みのパレードが始まる。町の子供たちの自転車隊や、ドラマーたちがパレードの先頭に立って、雰囲気盛り上げていた。夕方から始まる公演の行われるところは、町の広場の野外舞台だ。舞台には地元のパンドや劇団も参加して、夜遅くまで賑やかに、歌や芝居が繰りひろげられる。その間に地元の人たちとのミーティング。舞台が終わると民家や学校に泊まって、翌朝、朝飯を食べると次の目的地に向かって出発という、かなりハードなスケジュールだったが、フィリピンの若者たちは実によく働いていた。

舞台での出し物には、地主や資本家による、封建的抑圧に苦しむ農民や労

水牛通信 100号記念コンサート

笑う水牛 室内オペラ「可不可」

台本・作曲 高橋悠治

演出 津野海太郎

美術 平野甲賀

舞台監督 田川律

編集 鎌田慧

1987年12月11日、12日
築地本願寺蓮華殿



働者が、団結して新しい社会を作っていくという、定型化した芝居も目についたが、キャラバンの最初の町、カインタで上演されたPETA（フィリピン教育演劇協会）の「バナタ・サラヤーン」は、マルコス独裁から二月革命へ、高揚する民衆の夢と新政権の矛盾と、社会の不安と混乱、そして本当の自由を求めて闘い続ける民衆たち、という芝居で、ブレヒトを感じさせる構成はさすがに面白く、PETAの芝居を初めて見るわたしにとっても、刺激的な体験だった。またMASA（労働者演劇グループ）が演じたフィリピン創世の物語……。まだこの世の中が、空と海だけのカオスの世界だった頃、飛んで来た一羽の白い大きな鳥。鳥は果てしない飛翔に疲れたが、一面の海には休むところが無かった。そこで鳥は、空の神と海の神に喧嘩をけしかけた。海の神は怒って海水を吹き上げ、

空の神は岩を投げ落とした。この争いの結果、海にはたぐさんの島ができて、鳥は休むことができた。そのたぐさんの島々と、白い大きな鳥から生まれた二人の子供が、フィリピンの祖先である、という、フォークロアから構成された芝居も、面白い舞台になっていたし、この話の中にはフィリピンの人たちがよくいう、彼らのアイデンティティーの問題も含まれている。

どこの町の広場でも、たぐさんの人たちが集まって熱心に見ていたが、内向している地方民衆の政治意識を、民衆文化キャラバンがどこまで引き出すことができるか、熱心に働く若者たちを見ていると、この運動の成果は、この国の将来に向けての、一つの布石になるかも知れないと思う。

一〇月初めのサラス共産党議長長の逮捕、十一月に起きたオラリア人民党議長長の暗殺、エンリレ国防相の解任、そ

れと引き換えにされたサンチェス労相の罷免、NPAと政府軍の六〇日間暫定停戦、二月二日の憲法制定国民投票、五月の国会選挙と、フィリピンの情勢は目まぐるしく動いているが、社会のひずみの中で、貧しく、苦しみながら生活している人たち、権力の不正を暴き、民主主義を要求して独裁政権を倒した民衆たち、自由と民主化のために熱心に活動しているたぐさんの人たち、そして民衆を基盤にして、社会と密着しながら、したたかにおこなわれている文化活動などを見ると、われわれのまわりの文化状況というものが、いかに軽々しく虚ろなものであるか、アジアにありながら、アジアから遠く離れている日本の心、というものを考えさせられるのである。彼らの努力が実を結んで、フィリピンに、自由で民主的な社会ができることを、願わずにはいられない。

IBNONOK 閉店記 津野海太郎

デイヴィッドは走る。津野は歩く。

荻窪から中野まで、反対方向でいえば吉祥寺ぐらゐまでだったら、たいていは電車に乗らずに、本や雑誌を読みながら歩いて行く。本を読みながら歩くのは小学生のときからの習慣だから、そうとうの速歩である。たまに電柱にぶつかることもあるけど。

吉祥寺に行くのは、主として飲食の快楽のためである。したがって、帰りは電車かタクシーになる。

中野には週に一度、中野区立図書館にCDを借りに行く。このときは帰路も歩く。中野サンプラザ裏から早稲田通りに出て、高円寺をすぎ、中杉通りを阿佐ヶ谷駅方向に左折する。そのまま青梅街道に出て荻窪に戻る場合と、ごちゃごちゃ入り組んだ天沼の迷路を、曲り角ごとに途方にくれながら戻ってくる場合とが半々くらい。読書兼用の散歩だから、なかなか道がおぼえられないのである。

きょうはどっちのコースにするかを決める前に、かならず中杉通りの途中にあるBOOK INNに寄る。

店主の笠原さんと世間話をしながら本をえらび、「じゃあね」と外に出て、しばらく歩くうちに、どちらのコースをえらぶかが自然と決っている。すなわち、週に一度、私の中央線より方向の散歩にとって、BOOK INNは欠かすことのできない大切な中継点で

あった。その中継点が、突然、消えてなくなった。困ったぞ、私は——という嘆きが、じつは、いま書きはじめたこの文章のライト・モチーフなのだ。これから私は、なにを目あてに散歩をつづけたいのか？

昨年十一月の終わりごろ、その日も「じゃあね」とBOOK INNを出ようとしたら、笠原さんが「あいう」と声をかけてよこした。

「いままで黙ってて申しわけないんですけど、今年いっぱい店を閉めることにしたんです」

「ええっ、どうして？」

「はア、ちょっと腎臓をわるくしたもんですから……」

「うーん、そうかア！」

「あとですわね、このままだと、子どもたちとも、まったくつきあってやれないんですよね」

一九八一年七月にBOOK INN開店——それからの五年間については、以前、笠原さんへのインタビューを、「本屋さんの屋下がり」という題で、「水牛通信」一九八七年二月号にのせたことがある。

水牛——で、一人だと、ここに坐るっちゃうと、一日中、もう外に出られなくなっちゃうわけでしょう？

笠原——ええ。だから銀行いったり郵便物だしたりの雑用は、午前中に処理して……。

水牛——じゃ、仕入れは？

笠原——それも午前中。でも、午前中だと少ししかできないんで、水曜日に集中してやるんです。神田村に行つて、ちょっと真剣にまわると六時間はかかりますね、往復いれて。水牛——だったら、実質的には休みなしじゃないですか？

笠原——そうです。そうすると家族と接触する時間がなくなっちゃいますから、仕入れのあと、お茶の水とか新宿で待ちあわせして、夕飯くったりとかして帰ってくるんです。悲惨な生活ですよええ。

一人でやってる店だから、朝から夜中まで、一日の休みもなく働かなければならない。マンガも雑誌も小説も実用書もおこうとしない、そのくせ「水牛通信」はおいてある——といった極端に好みのきつい店だから、まともな商売になるわけがない。このインタビューをしたときも、私は、「おいおい、笠原さんよ、こんなことしてたら体をこわしちゃうぞ」と思った。そう口にしたっていったりもした。それが、案の定、そうなってしまったのである。

十二月三十一日まで店をやつて、一月いっぱいかかって後始末をすませ、

しばらく療養。そのあと静岡県島田市に引っ越す。とくに新しい仕事のあてがあるわけではないが、島田にはいい保育園があるので……。

笠原さんは三十歳。もうすぐ三十一歳になる。小学校三年の男の子と、三歳の女の子のふたごがいる。これまでは仕事一本槍で、その子たちとろくにつきあってやれなかった。だから、これからはしばらくのあいだは子ども本位の生活をする。いい保育園がある土地に居を移して、仕事は、一家四人が食っていけるだけのものをそこでさがせばいい。どうやら、かれはそう思いさだめてしまったらしいのだ。

かねてからBOOK INNの評判は耳にしていたが、実際に通いはじめたのは三年ほど前からである。

阿佐ヶ谷駅から中杉通りを北に数分——と聞いていたのに、どこまで行つて

も、それらしい店がない。途中で歩き
らめて引き返したことが二度あって、
やっと三度目にたどりついた。しかし、
そのときは店には入らなかった。こじ
んまりしたガラス張りの店が、なんと
なく気どろすぎみたいな印象で、正直
いって、ちょっと反感をもってしまっ
たのだ。

なのに、ふと気がついてみると、い
つのまにかBOOK INNに足を踏
み入れ、おだやかな——最初は気どっ
て見えた若い店主とも親しく口をきく
ようになっていた。

たぶん笠原さんから連絡をもらって、
毎月、『水牛通信』を配達するように
なったのが直接のきっかけだったのだ
ろう。いちど入ってしまったら、笠原さ
んは晶文社の本や私の友人たちが出し
た本、ひいては私自身の本までも、た
いへん結構な扱いでお店に並べてくれ
ていたわけで、それを見て私の反感は

ウタカタのごとく消滅した。他愛ない
話である。

とすると、最初、なぜ私は笠原さん
の店に反感をもったのか？

考えうる理由は一つ——町の本屋さ
んにしては、BOOK INNが、あ
まりにもきれすぎたせいである。商
品としての本というのは、あつかいに
くいしるものである。ちょっとでも気
をぬくと、すぐに汚れ、破れ、棚や平
台がゴチャゴチャに乱れてしまう。常
時、六〇〇冊をこえる新刊書をきれ
いに管理しつづけるというのは、なみ
なみならぬ難事業なのだ。

水牛——このお店、すごくきれいだ
よね。棚の感じが、日本の本も案外
きれいだなと思わせるほどなだけ
ど、なにかきれいにしておくコツが
あるんですか？

笠原——いやア、お客がすくないか

らじゃないかな。大書店とは、手に
とる人の数がちがいますから。それ
にうちは一冊しかおいてない本が多
いですから、お客さまが帰ったあと、
髪の毛がついてたりとか、オビが破
れてたりとかないように気をつけて
ます。

笠原さんがいっていることは、本屋さ
んにとっての常識にすぎない。ただ、
その常識をBOOK INN程度にき
ちんと押さえている本屋の数は、きわ
めて少ない。いつ行っても本がピカピ
カ光って見えるような書店、「へえ、
日本の本って、こんなにきれいだった
の」と感心させてくれるような書店は、
実際、「全国でいくつ」とかぞえられ
るほどしか存在しないのである。

その結果、あたりまえのことをやっ
ているにすぎない笠原さんの店が、か
えって異常なものみたいに、どこか気

どろすぎてるように見えてしまう。私
でさえ、はじめはそう感じたのでも、
それを商売として成立させ、それによ
って一家の暮らしを立てていくという
のは、なかなか困難なしごとであつた
にちがいない。

一月三十日の夜、BOOK INN
閉店の残念会をやった。

会場は中杉通りをはさんで、ちょう
どBOOK INNの向かい側にある
BANANA FISHというスナ
ック。五十人をこえるお客さんや出版
関係の人たちがあつまって、笠原さん
一家をかこんだ。子どもたちが可愛か
った。はじめに、私は発起人を代表し
て、以下のような挨拶をした。

「数日前、ひさしぶりに銀座のクール
という古いバーに行きました。マスタ
ーの古川さんは、もう七十ちかいのか

な、当代屈指の名バーテンダーである
といわれています。

古川さんは午後四時にカウンターに
入ると、あとは十一時の閉店まで、そ
こから一步も外に出ません。つまり、
その間、かれはトイレに行かないので
す。行かないですむように自分の体を
コントロールしているのです。私は笠
原さんのことを思いました。かね
がね私は、たった一人で店にいて、笠
原さん、いったいいつトイレに行っ
てるんだらう？——とふしぎに思っ
たのです。

手がすくと、古川さんは、いつも乾
いた布でキュッキュッとグラスを磨い
ています。

おびただしい数のボトルやグラスが、
一つ残らず、いつもピカピカに光り輝
いています。それを眺めながら酒を飲
む。どこで飲んでもおなじはずの酒が、
特にうまく感じられます。ふたたび私

は笠原さんのことを思いました。
笠原さんも、いつも本を磨いていまし
た。BOOK INNでは、いつも乾
いた布で本を磨くキュッキュッとい
う音が聞こえていた。なんだかそんな気
がしてなりません。

私はBOOK INNは名店だ
と思えます。すくなくともクール級の
名店になる可能性をもった店だったと
思います。

笠原さんは古川さん同様、おだやか
な、しかし頑固な職人気質の持ち主で
す。こんど笠原さんがお店をたたまな
ければならなかったのは、それはそれ
で残念なことにはちがいませんが、
まだ笠原さんは若いのです。古川さん
の年齢になるまでには、かなりの時間
があります。いずれ機会をみて、また
名店の可能性にアタックしてみてください
さい。なにも本屋じゃなくたっていい
んですから。たのしみになります」

料理がすべて 田川律

(病人自らの全快祝い)

ふつう全快祝いといえは、まわりの人が病氣だった人にいろいろしてあげるもの。ところが、どうやらぼくの場合、そうではないらしい。十二月十九日に退院してくるやいなや、待つてましたとばかり、あちこちから料理を作れという注文がやってきた。手始めは、そろそろ今頃出ている筈の「田川律(台所)術——なにが男の料理だ!」(晶文社)のためのもの。本文

中に入れる写真のために、料理をしなくてはならなくなった。しかも編集部は、病み上がりに見えてはならない、というのだから。ま、幸いこちらは、入院中からどこが病人という顔をしてたから。それでも一応は「すき刺る」という名の便利なバリカンを使って、例のごとく髪を短くカットしてその日にそなえる。

「お客は美女三人」というわけで、田園調布の「パテ屋」の林の子さん給描きでこの本に素敵ないラストを描いてくれた柳生まち子さん、そして本誌の事実上の編集長、八巻美恵さん。もともとこの本を作ろうといってくれたのは、ほかならぬ海ちゃんだから、かれが食べたい物と思ったのだが、まちなさんが「どうせならレシピの中で、難しそうなのを」ということで、「トリの丸焼き」を作ることにした。そしていつもならここでその作り方が

出てくるのだが、そちらは是非この本を見て下さい。(なんか宣伝ばいなおすみマセン。)

(ハムと大根のサラダ)

さらに一月四日、今度は大阪でまた料理人をやらされた。ここ数年いつも正月に大学の同窓生たちが集まっているのだが、それがいつか「ぼくの料理を食べる会」みたいになってしまったのだ。今年は何にしようか、と悩んだが、なんのことはない、またまた「トリの丸焼き」を作ってしまった。ホントは「丸煮」にしたかったのだが、予め作る暇がなかったので、食べてくれる人が三、四人ならともかく、十五人もいるので、いきなりまったく始めての物を作るのはオソロシかったので止めたのだ。「丸煮」というのは、美恵さんが教えてくれた物で、トリの中にモチ米と刻んだナツメと朝鮮人参を詰めて、そのままお湯の中に入れて

塩味で煮るだけというもの。極めて簡単そうのだが、やっぱり一回は作ってみないと心配だ。

ところが、思わぬところに伏兵がいた。うちでやった時は、トリが小さかったので「拾ってきたオーブン」でも四十五分でちゃんと焼けたのだが、今度はなんと一羽が二キロ以上もあったら、一時間焼いてもまだ火が通らないのだ。その上、二羽目は予め電子レンジを使って三十分も調理したのに、その後でオーブンに入れて強火で二十分焼いて、それでも火が通らない部分があったのだ。「トリの奴め、あんまり簡単に度々作るから、いけずしやがった」という心境になった。

サラダはちょうどこの頃テレビで、貝柱と大根とカイワレをマヨネーズであえるのを、宣伝でやっていたので、貝柱のかわりにハムを使って作った。こちらは大変好評であった。

(カスタード・クリームの失敗)

それより一週間ほど前、暮れも押し詰まった頃に、大塚まさじのうちで、やっぱり「全快祝い」をやらされた。

こちらは大塚ちゃんの希望でチゲ鍋を作った。それはまあうまくいったのだが、それから数日後のこと。正月早々、かれの所へ遊びに行ったら、大塚ちゃんが「ほならクレープでも作りまひよか」と言い出した。これはかれの得意のレパートリーのひとつなのだが、「それならぼくはカスタード作つたるわ」と言ったのが失敗の始まり。その少し前に、女友だちの一人から

「カスタードなんか簡単よ。砂糖と牛乳とカタクリ粉を混ぜて、それに卵の黄味を入れて火にかけたらいいの」と聞いていて「そやなあ」と感心してたので、早速チャンス到来と張り切って台所になった。ところがボウルに砂糖とカタクリ粉を入れ、卵の黄味を落と

して、さあ次は牛乳や、という段になって、かれが「しもた、牛乳がなかったわ」と言いだした。「ココナッツ・ミルクやったらあかんかな」と、どうみても開けてからもうだいぶ日にちの経つてる缶を出してくる。「そら、クレープの方はそれでもええやろけどカスタードは無理やで」とぼく。幸いすぐ傍にぼくらの親友のイラストレイター沢田としきくんがいたので、かれの所へ借りに行こうと出掛けたら、近くの店が開いていて、その問題はあっさり解決した。帰ってみると件のボウルの中の物は、固まってしまっている。それでも牛乳を加えてかき混ぜて、なんとかもわれをなくし火に掛けた。「さあこれでおいしいカスタードができるぞ」と心は早くもシェーククリームの中のカスタードへと飛んでいた。「ませ続けてんとあかん」と必死にまぜていると、突然固まり出した。

それもきわめて急速に固まってしまい、不透明な団子みたいなものができてしまった。「カタクリ粉が多すぎて」と、再び挑戦したが、今度は柔らか過ぎるモノができただけ。「適当」だけではうまくできないものがあると、思い知らされた。それから数日経って、くだんの友人にこの話をしたところ、「ごめん、カタクリ粉でなくて、薄力粉だった」だって。

(用心深さのきわみ)

新年に大阪で母に病気が直ったことを事後報告しようと電話したら「悪いけどうちへきてくれへん」と強く頼まれた。身体でも悪いのではないかと心配になって訪れたら「べつにそんなやないね。いちいちこれ持って歩くのが大変やさかいな」とビニール袋を指す。例の醤油や酢の小瓶が入った袋だが、どうやらそこに「とろろ昆布」から「チリメンジャコ」まで入れてあ

る。ようするに、家にある食品品全部を肌身離さず持って歩くようにしたらしい。「こら、大変や」ぼくの母だけがこんな用心深いのか、世の中の人暮らしのお年寄り皆そうなのか。

(鯛と蟹と数の子)

金沢から相次いで鯛と蟹を送って貰った。鯛は「もっさりや」という友人がやってくる店を出しているミニコミ紙に原稿を書いたお礼。そのすぐ後で今度は帯広から数の子を送って貰った。

こちらは「ふるさと十勝」に書いている原稿のお礼。もう十年前も前、新潟の新発田に住んでいる友人が「出演料の代わりに米で払う、というのに賛同して出してくれる人はいてないだろうか」と相談を受けたことがある。この時は結局そういう人はいなかったが、どうやら今、ぼくがそれをしてみたい。

因果は廻る・・・かな。

鯛は照り焼きと塩焼きにして、せつ

せと食べたが、数の子はまだ冷蔵庫の中に眠っている。蟹はもちろんとうの昔に「朝飯」に食べてしまった。

(娘たちよ！)

こんなタイトルの歌があったような気がするが、この話は全然それとは関係がない。こどものいないぼくには、よそまのことも思えたりする。時には自分より若い人は全てこどもに見えたりして。そう考えると、扶養家族のなんと多いことか。やっと一歳になったイラストレイターの双子のこどもから、そろそろ四十になるうという友人まで北海道から沖縄まで、何十人どころか何百人もいそう。つい先日でも大学の同窓生から「ちょっと相談があるんやけど」といわれた。何かと思ったら「十七歳になるうちの娘が歌手になりたいいうて、歌をうとてたら、プロダクションから誘われてんだけど、どうしたら

ええやる」という。同窓生のかの女はかつてぼくの生家ほど近い大阪の緑橋で薬局をやっている家の一人娘。漢方の胃腸薬「翁丸」を三百年も作っている老舗。現在は大阪国際空港の近くでまだ健在な両親と店をやっているのだが、いつのまにか五人の母。

ハード・ロックをうたっている娘は現在高校の二年生。つい先日、近くのプロダクションからスカウトされたとかで、母親つまり多くの同級生(厳密には二年ほど下だけ)から「なんとかしてほしい」と相談された。「なんとか、といわれてもなあ」というのが本音だけど、とりあえず、そこがどんなプロダクションか、大阪の友人たちに聞いたりして、そこへ入るのだけは思い止まった。だけど本人は高校を卒業したら歌を続けるつもりらしいし、親はせめて大学には入って欲しいというし、なかなか大変だ。

(牡蛎とじゃが芋のお好み焼き)

さすが大阪、と思われたのが、ここ二回ほど出掛けて、ともかく「お好み焼き」と縁が深かったこと。「すじねぎ」というのも知らなかったのだがこれはスジ肉を柔らかく煮たものとネギを使った「お好み焼き」で、これがなかなかのもの。北の太融寺の一角の店で食べたが、これは簡単にその作り方を盗めそうになかった。刻んだネギを山のように使い、それと「煮込み」と呼ばれる、スジとで作るが「企業秘密」はこの両者を挟む、溶いた粉にあるようだ。卵をたっぷり使っていることぐらいはわかるけど、初めに下に敷くヤツと、ネギとスジをのせたあとでもういちど上からかけるヤツが微妙に違うものなのだ。こういう時には、あっさり諦めてそのおいしさだけに専念したほうがかしこい。

牡蛎一個で卵十個分の栄養があると

教えてくれたのは、厚岸のキンちゃん

だ。本人が牡蛎専門の漁師だから、この言葉は割引して考えなくてはならないかもしれないが、もともと牡蛎は大好物。大阪の猪飼野のお好み焼き屋「桃太郎」で覚えた「牡蛎とじゃが芋」のお好みを、神戸近辺で二日続けて作ってしまった。

用意するもの。新鮮な牡蛎、じゃが

芋、長薯に小麦粉、だし汁に卵、紅生姜に干しエビ。長薯をすりおろし、粉と卵とだし汁にませ会わせ、そこへ紅生姜と干しエビを加える。じゃが芋は輪切りにして、さつとゆでる。鉄板に油を引き、まず牡蛎と芋をざつと焼いて、そこへ、このいろいろませたものを、たっぷり加えて焼く。焼き上がったら、ソースとマヨネーズを塗って、好みでかつお節と青海苔をふりかけて食べる。それぞれの材料の配分は、作る人の好みで適当にすればいい。

不可不可 (その一) 高橋悠治

入口から階段をあがって、長い暗い廊下を通る。柱の陰からだれかが見ているようだ。見ないふりして通りすぎる。だって、だれもないんだから。つきあたりに重い観音開きの扉。その向うにうす暗い大広間。その奥は、仕切りなしにもうひとつのへやにつづく。というより、どこからか光がぼんやり差しこんでいて、その光のとどく範囲でだけ、もうひとつのへやが、こちら側にはみだしてきてしまったのだろう。

ベッドがひとつ。幅広い階段。(こんなものがへやのまんなかにあるなんて——あるような気がしている。だけな

んだ、きっと。あがったところでなにもない。おりてきたってなにもない。へやにはいつてきたひとは、そんなものはないようにふるまっている。それじゃ、やっぱりないんだ。それでも、しっかりそこに根をおろしている、この階段。非公認の存在。)

片隅に椅子と机。机の上にノートブック、ペンとインク。(インクが切れたら、物語もおしまいだ。)

窓がひとつ。カーテンをあければ、暗い小路を見おろせる。暗い街灯の下を通りかかる、帰宅を急ぐ独身者に、待ち伏せていた犯罪者がナイフをひらめかして、おそいかかる。なぜって、もう帰る家はどこにもないからさ。それでも帰宅しようというのは、どこかまちがってはいはないか？

ベッドにねている男がひとり。その前に立っている男がひとり。背をむけて、机の前に坐っている男がひとり。

なにか書いている。(だって、書いていなければ物語はなく、物語がなければこのへやもなく、これを読んでいるきみだっていないんだから。)

歌がきこえてくる。そうそう、歌い手を忘れていた。歌い手は、ちいさなバンドをしたがえて、はじめからそこにいた。(そっってどこさ？ さあ、どこだろう。このへやのなかに、いくつかの楽器をおいたステージをいれるわけにはいかないしね。といって、歌がまったく無関係にあるとは言えないだろう。なぜって、歌がなければ、物語は物語ではないただの灰色の毎日にもどってしまい、そうなればこのへやも、ほかの何百万のへやと見わけのつかないただの穴倉同然、そうなれば、光も消えて書くこともできなくなり、そうなれば、それを読むはずのきみだつていなくなってしまうんだから。しかたがない。それじゃ、歌い手は最初

からそこをいた。そことは、このへやのなかに、どこかからはみだしてきた別な空間、としておこう。)

はじめの歌——

インディアンになりたいな

ほら もうなった

ななめにうかんで

からだをふるわせ

ちきゅうもふるえてる

はくしやをなげすて

(ないんだもの)

たづなをなげすて

(それもなかった)

大草原もみえなくなった

うまのたてがみもない

くびもない

片足で立って、うかびあがろうと、もがきながら、からだをふるわせているのは、ベッドのそばの男。この歌は男のあたまのなかで鳴っていたんだ。すると、ねていた男が突然毛布をけ

とばして、ベッドの上に立ちあがる。

ナイトシャツのすそを乱して、片足ずつびよびよんけりあげ、ベッドの前の男に人差指をつきつけて左右に振りうごかし、ころげおちそうなほど身をかがめ、またまっすぐ伸びあがって、あたまの上で両腕を振りまわす。

何か必死に言っているのに、ことばがきこえてこない。そこで、こんどは机の前で書いている男が立ちあがる。ベッドの男のあたまのなかでぶんぶんうなっていることばを、手話通訳のように、区切って発音する。だって、このことばは、いま机の上のノートブックに書いたばかりなんだから。

「おかあさんは死んじゃった。ともだちは遠いロシアで、古新聞みたいに黄色くなっている。おとうさんは毛布でぐるぐるまき。こどもだと思っただが、おまえは悪魔みたいな人間だな。さあ、判決だ。溺死による死刑！」

ベッドの男が何事もなかったかのようになり、すばやく毛布にくるまると、ベッドの前の男が走りだすとは、ほとんど同時だった。だけど、走りだして、どこへ行くのさ？ だって、ここはへやのなかなんだからね。

階段をかけあがり、かけおり、あいたドアのところ——そうそう、忘れていた。このへやには、たったひとつのドアがあって、と言っても棒だけで、扉はない。だから、このドアはいつもあいている、とも言えるし、しまっている、と言ってもいいのだ。——ドアのところを女中とぶつかって、ひっくりかえす。

「かみさま」と、女中は言って、前掛けで顔をかくした。

あいたドアから走りだし、と言っても行くところはなから、結局また、あいたドアから走りこみ、階段をかけあがり、—— (つづく)

走る・その⑫ デイヴィッド ・グッドマン

結晶の朝。昨夜三〇センチほどの雪が降って、外界は白く、まぶしく、やわらかになった。除雪は夜もすがら続けられたが、住宅街はまだそのまま雪に埋もれている。

靴の紐を結びながら、ぼくは走る計画を立てた。歩道はまったく通行できない状態になっている。したがって車道を走るより仕方がない。住宅街を走るのは、羽布団の上を走るようなもので、足は雪にしみ、左右にすべり、

ちっとも速度はでないだろう。幹線道路は除雪されてはいるだろうが、両側に雪が積み上げられていて、道はそれだけ狭まっている。やってくる自動車に轢かれぬように気をつけなければならぬ。

ストックキングキャップをかぶって、手袋を二重にはめた。これで完全武装だ。

ドアを開けて外に立つと、雪はスネのなかほどまでとどく。これじゃ話にならないが、道路へ出れば、なんとかなりそうだ。除雪はまだだが、轍がある。轍をたどっていけば、なんとか走れそう。

といっても、轍は細くとも真っ直ぐな畦道のようにはない。複雑に交差したり、途切れたりしている。それでも、轍をたどっていけば、辛うじて走ることができる。だが、轍があっても、雪の世を走るのはたいへんだ。

ないよりいいが、うまくいくという保証にはならない。

*

医者は、ぼくの膝に跨がって股を広げているカイの短いチンチンを引っぱって伸ばし、表面麻酔をした亀頭の下をちくりと針で刺した。血が出ない。

また刺した。カイは机の上におかれた鉛をじっと見つめて、黙っている。三回目によっと一滴の血が出た。

「見えますか？ 見えますね？」とカイのチンチンにあらわれた、たった一滴の血を示して医者はいった。

「見えます。見えました！」とぼくたちを囲み、カイのチンチンを注目している三人の男たちは口々にいった。

「おめでとう！ おめでとう！」
「しかし、えらいね。ちっとも泣かないじゃないか」

「ほんとだよ。このあいだ海兵隊員の割礼にも立ち合ったんだけど。でっかい男でね。真っ青になって、失神しちゃったよ」

「いや、たいしたもんだよ、ほんとに。たったの三歳半だろう？ 感心した」

カイは男たちににこりと笑った。褒美の飴をなめている。

「さ、今度は泳ぎにいこう。お母さんとお姉さん呼んでいいよ」司祭を勤めているラビはカイにこういった。カイはぼくの膝からとびおりて、ズボンを引き張り上げつつ、廊下で待っているお母さんたちを呼びにいった。

全員で東京のユダヤ教会の三階から地下室に下りていった。そこに「ミクヴァ」という、雨水を溜めた禊専用の沐浴場があるからだ。

カイとぼくはタオルばりのロッカー室に入って服を脱いだ。ぼくは水着を

つけた。カイは一糸まとわぬ姿だ。ロッカー室から出てくると、和子がぼくたちをビデオで捉えようとしていた、慣れないカメラを床に向けたり、天井に向けたりして。ヤエルは泳ぎにいける弟を羨んでいる様子だった。

「ちょうどいい具合に温まっている。きつといい気持ちだよ」とラビは、ぼくに抱かれて、浴槽への二メートルほどの長く、けわしい階段をおりていくカイにいった。

「三回お湯に沈ませるんです。お湯に下ろしてから、手を放してくださいね。一瞬でもいいから。そうしないと、濡れない箇所が残ってしまいかもしれない。浸礼では水がからだのすべての部分にふれることが必要ですからね。いいですね？ 頭まで沈ませるんですよ」とラビはぼくに指示した。

ぼくは「わかりました。いいかい、カイ？ いきますよ。一、二の三！」

とカイのすべすべしたからだを湯につけた。ラビの指示どおり、ほんの一瞬、ぼくは彼の方からだをささえていた両手を放したが、即座に掬いあげた。びっくりして咳きこんでいるカイをしっかり胸に抱き締めて、咳がとまるのを待ってから、もう一度沈ませた。そしていま一度。

「我らを生かすため、我らを守り、また我らをしてこの時に至らしめ給まい宇宙の王、主なる我らの神、あなたは養むべきかな」全員声を揃えて、感謝と喜びの祈禱を唱えた。

「カイ・グッドマンくん、これであなたはユダヤ人になった。おめでとう！」

(つづく)

編集後記

今月から木島始さんの連載がはじまりました。絵も木島さんです。今年はずらって終わることができるよう、台本のつもりで「可不可」を連載する。

今月の逮捕された人リケットさんは、原稿の校正にバイクでかけつけただけでなく、その後も版下ができる最後の瞬間まで数回にわたる電話でこまかい修正を指示するのだった。しかし、本号の発行がいつまながらおくれたのは、もちろん他の人びとの責任なのだ。3月5日(木)6時半、新宿モーツァルトサロンで、「国について歌についてコンサート」がひらかれる。出演は林光、三宅様名、山住正己、斉藤晴彦、巻上公一。千五百円。問い合わせは、

☎265・2171志沢まで。

3月8日(日)2時は、本郷のバリオールで守田正義さんの作品のコンサート。戦前プロレタリア音楽運動で知られた「里子にやられたおけい」の作曲者・今年82歳の守田さんはますます元気で、平和をうたった新作歌曲もある。出演は佐山真知子、高橋悠治ほか。二千円。問い合わせは☎0488・86・6411黒沢まで。

3月3日(火)7時には、おなじバリオールで自分のコンサートをす。「夜の時間」第2回。ゲストは吉原すみれと高橋鮎生。三宅様名の打楽器とピアノの曲「東へすすむ」、高橋鮎生のピアノ曲「絵のなかの姿」など。自分で書いたのは「朝のまがりかどまがれ」の打楽器とピアノ用の版だけ。このタイトルは長谷川四郎さんの詩からとった。と、コンサートのお知らせばかりになりました。(高橋)

*本誌は次の書店にあります。

- 模索舎(新宿) ☎352・3557
- 信愛書店(西荻窪) ☎333・4961
- ワンラブブックス(下北沢) ☎411・8302
- アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
- カンカンポア(西武渋谷店B館B1F)
- ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
- 名古屋ウニタ書店 ☎731・1380

水牛通信 第九巻第二号 一九八七年
 二月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田
 正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎03
 東京都世田谷区新町2-15-3八巻方
 電話〇三(四二五)九六五八 振替口座
 東京四一九一七九二 印刷所 柳トライ
 プリントショップ